

京都国際マンガミュージアムにおける来館者調査 ——ポピュラー文化ミュージアム¹に関する基礎研究——

村田麻里子* MURATA Mariko

山中千恵** YAMANAKA Chie

谷川竜一*** TANIGAWA Ryuichi

伊藤 遊**** ITO Yu

I. 本研究の射程

ポピュラー文化とミュージアムの交錯するところには、何が生まれるのだろうか。90年代以降、アニメやマンガ、映画や音楽をはじめとするポピュラー文化がミュージアム化されるという現象があちこちでみられる。元来ポピュラー文化は個人的に消費されるもの、あるいは部族的共同体（趣味の共同体）で消費されるものとして捉えられてきた。とりわけ日本ではそのように扱われており、パブリックになろうとする際には常に反発があった。一方で、公立のミュージアムは教育機関としての存在理由が強く、趣味の蒐集品を個人的に展示する小さなミュージアム以外には、大々的にポピュラー文化を扱うことには、長らく躊躇があった。しかし、両者は現在確実に距離を縮めつつある。そして、それはミュージアムにもポピュラー文化にも、これまでになかった新しい在り方、新しい受容の仕方を生み出している。

たとえば京都国際マンガミュージアム（写真1～4）は、廃校を利用してマンガのミュージアムをつくり、それによって多くの来館者を獲得している。地元の住民もさることながら、京都という土地柄観光客も多い。また海外における日本のマンガ文化への関心の高まりを反映してか、外国人来館者も全体の1割以上にのぼる。所蔵するマンガ資料は30万点を数えるが、そのうち5万点のマンガ単行本は壁を覆い尽くす「マンガの壁」に収納されており、来館者はそれらを手にとって館内の好きな所で読むことができる。さらに年に複数回行われる特別展・企画展や、作家や研究者による講演会やシンポジウムなどによって、マンガ文化を様々な観点

* 関西大学社会学部／メディア文化研究・ミューゼオロジー

** 仁愛大学人間学部／社会学（現代文化、韓国研究）

*** 東京大学生産技術研究所／建築史・都市史

**** 京都国際マンガミュージアム／マンガ研究・民俗学



写真1 京都国際マンガミュージアムの外観



写真2 館内でマンガを黙々と読み続ける来館者。床や階段に座り込む姿もめずらしくない



写真3 特別展「サンデー・マガジンのDNA」展の様子



写真4 「子ども図書館」はマンガを‘ゴロゴロ’読むのに最適の空間

から展示・紹介している。ミュージアムという公共性の高い空間とマンガ文化がこのように接点を持ったとき、果たしてそこにいかなる営みが生まれるのだろうか。また、ミュージアムを訪れる来館者=受け手は、どのようにそれを受容しているのだろうか。本研究は、このような問いに答えるための基礎研究である。

II. 調査の概要

ポピュラー文化がミュージアムになったひとつの事例として、京都国際マンガミュージアム（以下、MM）^{えむえむ}をとりあげ、来館者がどのようにその空間を受容しているのかに着目して調査を行った。具体的には、マンガを扱うミュージアムにおいて来館者=受け手が館内にどれくらい滞在し、実際には何を過ごしているのかを把握するために、館全体を対象にトラッキング（tracking）を行い、来館者の行動を分析した。

トラッキングとは来館者の動線を把握する事を目的として行われる追跡調査のことである。ミュージアムにおける来館者調査の伝統的な方法論²のひとつであり、対象となる空間の図面をおこし、そこに来館者がたどった経路を調査員が手で書き込んでいく。どこで留まったか、どこに視線を向けたかなども記号で書き込み、それ以外にも気がついたことをメモする³。館

内で来館者がどのように行動しているのか、空間をどのように利用しているのかを把握するにはもっとも有効な方法であり、インタビューやアンケートでは捉えきれない細かい行動や無意識の動作に焦点をあてることができる⁴（一方で、何を考えていたかを測ることはできない）。

今回の調査の大きな特徴としては、館全体を対象に行ったことである。通常トラッキングとえば、対象範囲を展示室に絞って行き、展示室内での来館者の行動を記録・分析する場合はほとんどである。そもそも展示の善し悪しを測る目的で調査が行われることが多いうえに、館全体で行うにはあまりに作業の労力やストレスが大きいからである。しかし、本研究の目的に鑑みれば、館全体の受容に着目することは必須条件であり、敢えてこの方法論を採用した。

調査は村田・山中・谷川の3名と館側のスタッフである伊藤の共同研究として行われ、館の全面的な協力を得た⁵。2009年10月18日(日)・19日(月)にパイロット調査を行い、11月13日(金)の調査員説明会を経て、特別展「サンデー・マガジンのDNA」展⁶の開催期間中である11月14日(土)から22日(日)にかけて1週間の本調査を行った。これは平日と休日の双方を調査日に含めるためである。各日調査員⁷を3組(計6名)フロアに立たせ、データを収集した。その結果、68件⁸のデータを取ることが出来たが、1週間もの間毎日3組の調査員がデータをとっていたにもかかわらず100件に届かなかったことから、いかに長時間の滞在が多いかがわかる(表1)。

表1 集計データ(最長、最短、平均など)

	データ番号	滞在時間	入館時間	退館時間	分類	年齢	性別
最短	データ54	0:15	10:30	10:45	M	50~55歳	男性
最長	データ50	7:39	10:16	17:55	L	30~35歳	女性
全データ平均滞在時間		1:53	68件中61件の有効データの平均値				

Ⅲ. 調査の結果

トラッキングの結果、次のような典型例がみられた。まず、それぞれ「図書館(Library=L)型」、「博物館(Museum=M)型」と分類できるような行動パターンである。前者は主に館内でマンガを読んで過ごす利用の仕方であり、^{えむえむ}MMを図書館として認識して行動するパターン。後者は、展覧会はもちろんのこと、手にとって読めるマンガ本5万冊が収納された書棚「マンガの壁」や建物それ自体を展示物として捉え、^{えむえむ}MMを博物館として認識する行動パターンである。たとえば図1は、典型的なL型の動線といえる。入り口から本棚に直行し、その後ほとんど動かずにマンガを読み続け、退館している。一方図2では、一か所に長時間とどまることなく、館内を動き回ったことがわかる。特別展にも入り、30分ほどかけて展示をくまなく見た様子が見える。これはM型の典型例といえるであろう。

これらの典型例は、ミュージアムスタッフが日頃感じている来館者イメージと合致するもの

であった。すなわち、来館者には展示をみにくる層とマンガを読みにくる層の2種類存在するというイメージである。

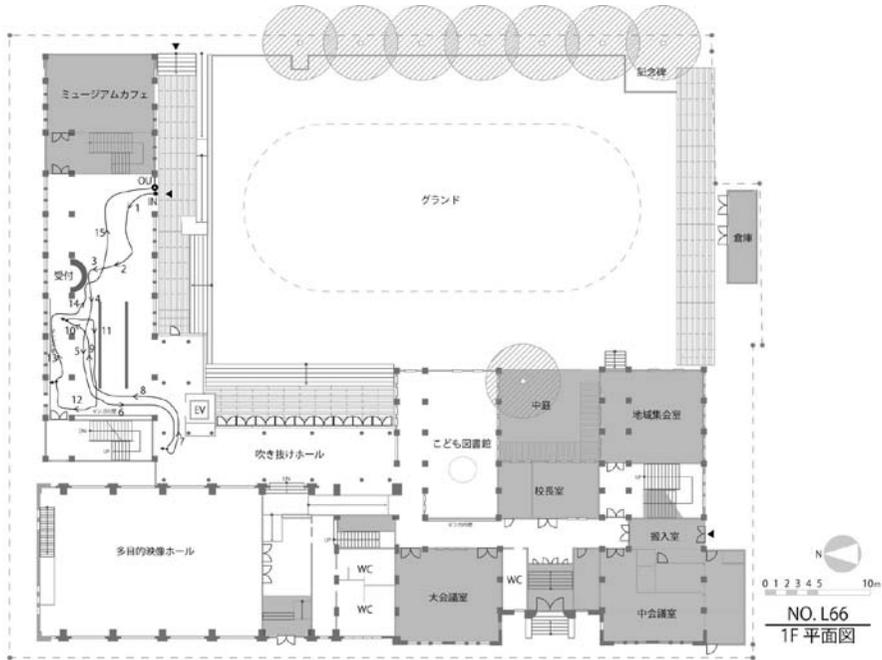


図1 L型の典型的な行動例 (トラッキング・データ66)

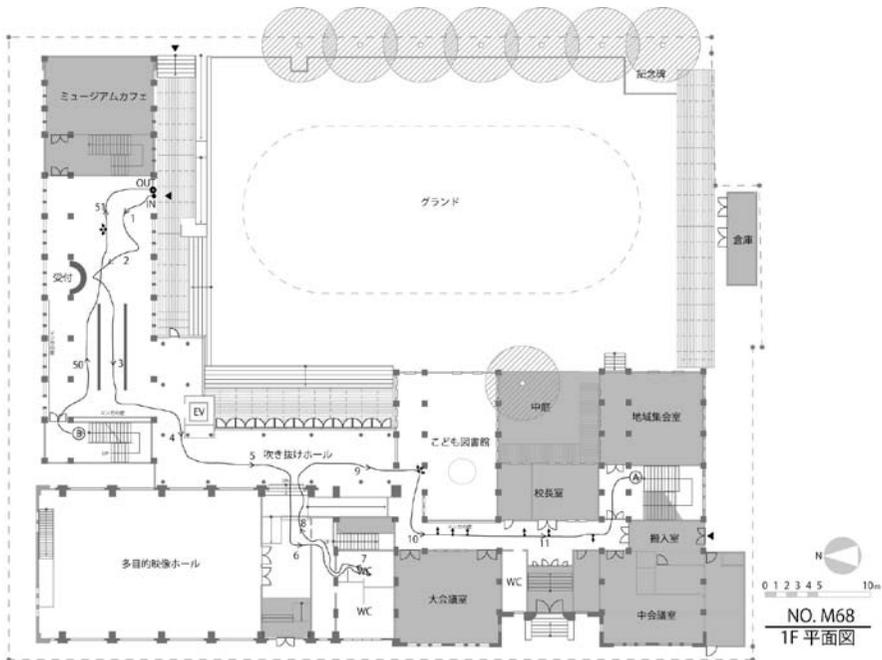


図2-1 M型の典型的な行動例 (トラッキング・データ68, 1階部分)

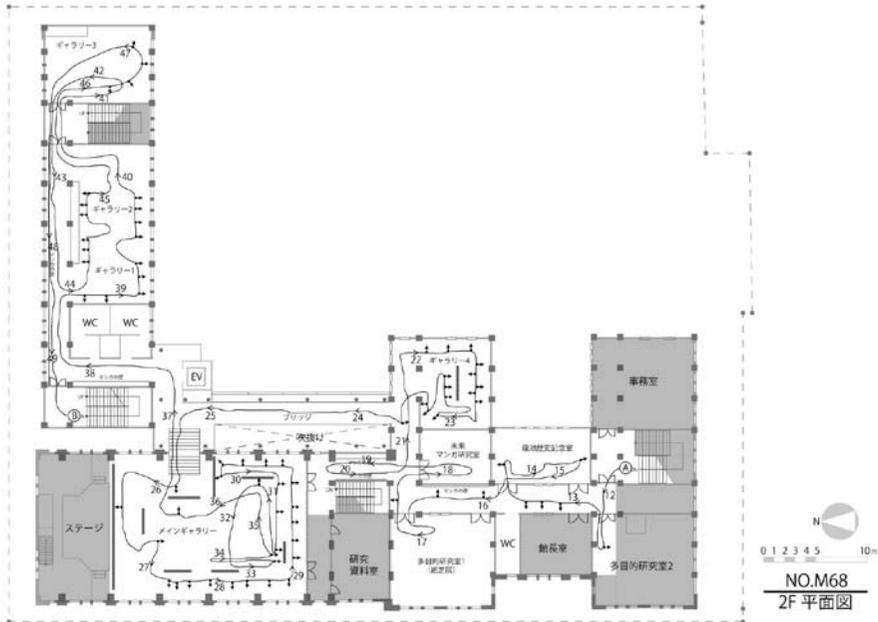


図2-2 M型の典型的な行動例（トラッキング・データ68, 2階部分）

また、L型とM型の層は完全に分かれているわけではないことも、データからあきらかになった。両者の行動パターンを行き来する「融合（Complex=C）型」である（図3）。C型は、グループで来館し、他のメンバーに付き添ったり、彼らを待っていたりする人に多くみられる行動パターンである。M型の行動をしているときに、なにかの瞬間でL型にシフトしたり、またM型に戻ったりする。

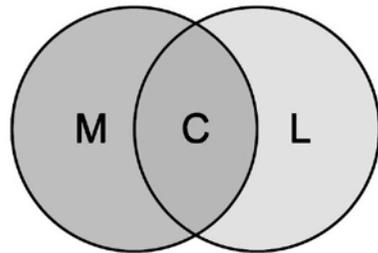


図3 M, L, Cの関係性

以上の3つの類型は、ある程度予想できるものであった。しかし、今回のデータからあきらかになったのは、このM, L, C型以外の行動パターンの存在である。

たとえば図4をみてみよう。この来館者は、グラウンドと館内の間を何度も行き来しており、M, L, C型とは異なる動線を描いている。また、グラウンドではマンガをほとんど読むことなく、ケータイをさわったり、スケジュール帳を開いたりして時間を過ごしている。つまりこの来館者の目的は、^{えむえむ}MMの空間で時間を過ごすことそれ自体にあるといえる。

次に、図5の来館者の場合は、「子ども図書館」に長時間滞在している。しかも、ここでマンガを読むわけでもなく、寝ころんだり、絵本を読んだり、流れているテレビアニメをみたりして過ごしている。

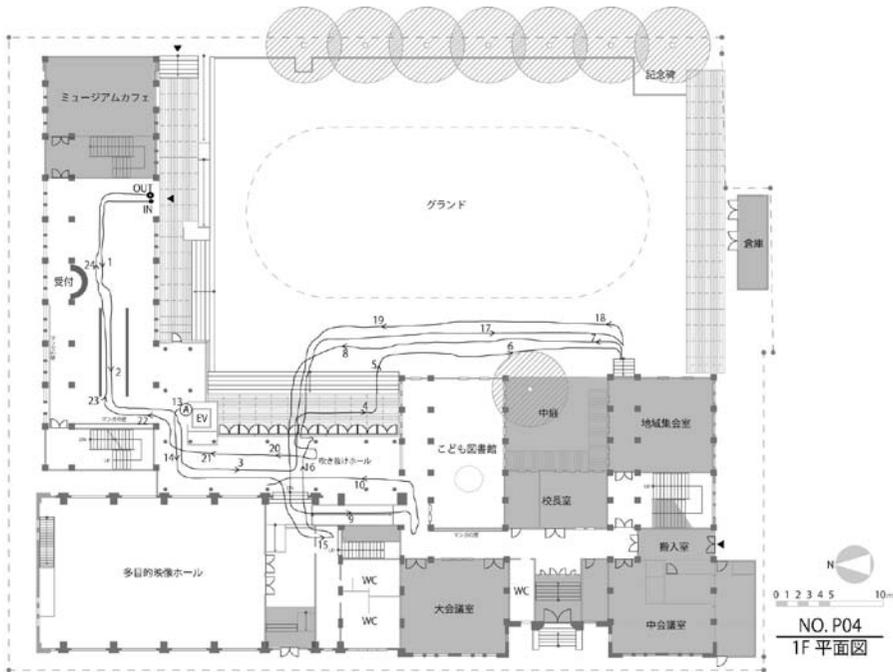


図4-1 P型の行動例 (トラッキング・データ04, 1階部分)

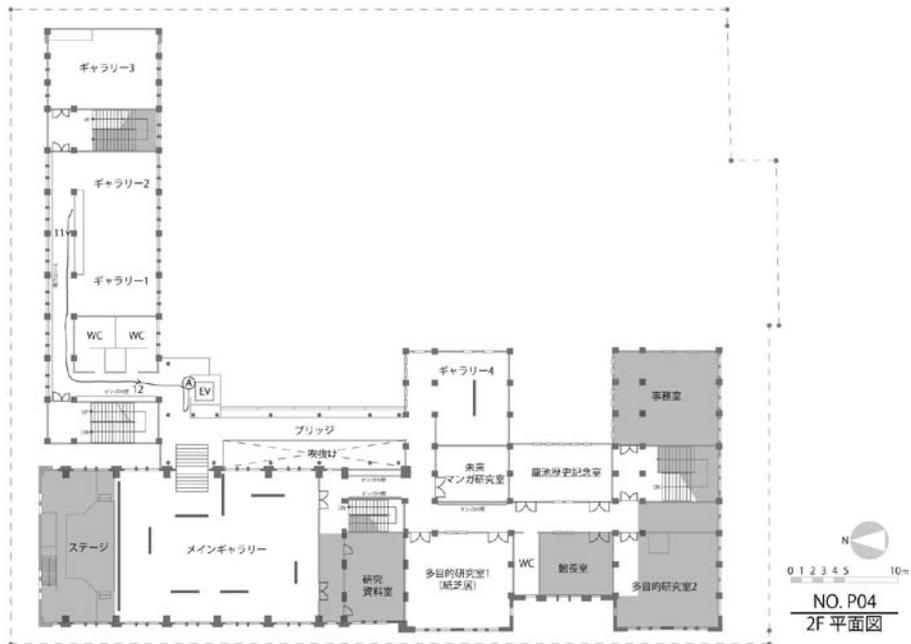


図4-2 P型の行動例 (トラッキング・データ04, 2階部分)

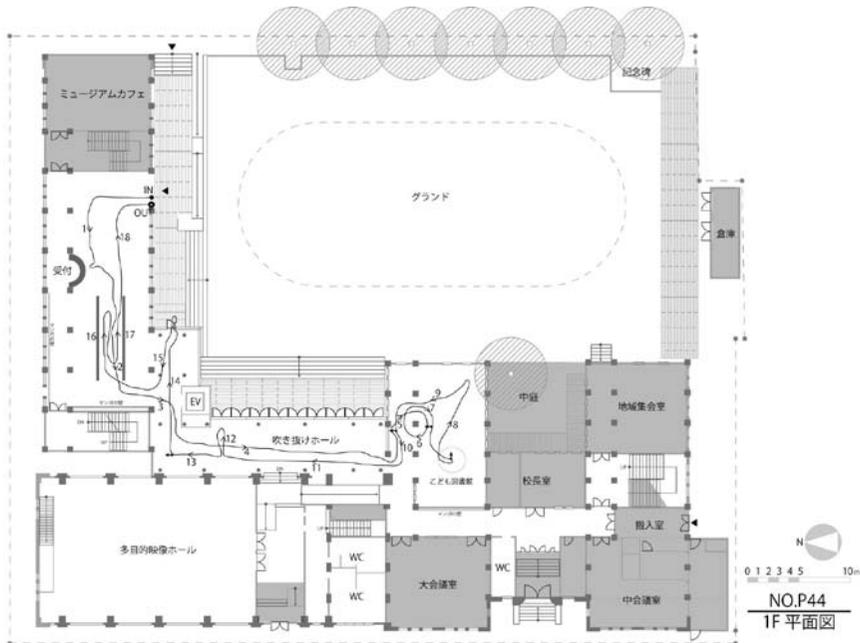


図5 P型の行動例 (トラッキング・データ44)

これらの来館者層は、M、L、C型のいずれに割り振ることもできない。つまり、この3類型では説明がつかない利用方法が存在することを物語っているのだ。そこで、本論では、このような来館者の受容の仕方を「公園 (Park=P) 型」と名付けることにした。このPの存在は相対的に大きく、かつ多様なパターンが浮かび上がるのである (図6・7および表2)。

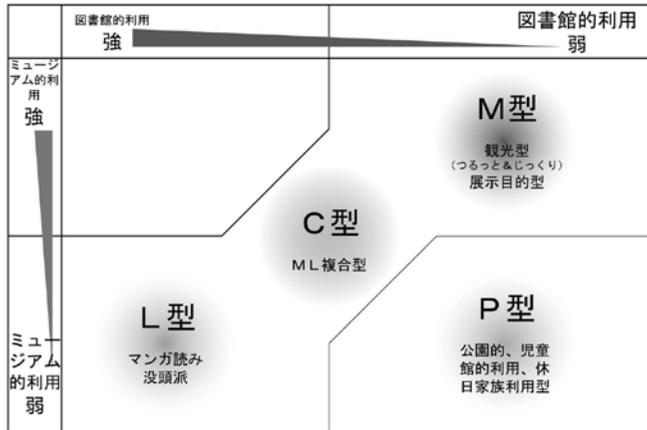


図6 M、L、C、P 4つの行動類型の関係性。図書館の利用もミュージアムの利用も弱いところにP型が位置する

では、このPの存在はいかにして生じてくるのだろうか。

結論からいえば、PはMがなくても、Lがなくても、存在し得ない。MとLが互いにせめぎあう(=いかし合うと同時に抑制し合う)ことで出来上がる空間が、Pなのである。そして、このようなせめぎあいは、以下の3つの要因が絡み合うことによって起きているのではないだろうか。すなわち、(1) ^{えむえむ}MMの建築空間的な「矛盾」、(2) ^{えむえむ}MMの設立理念の複雑性、(3) マ

ンガ体験の特徴、の3要因である。以下、順に考察を進めながら、「P」と名づけた行動が立ち現れてくる理由を検討していこう。

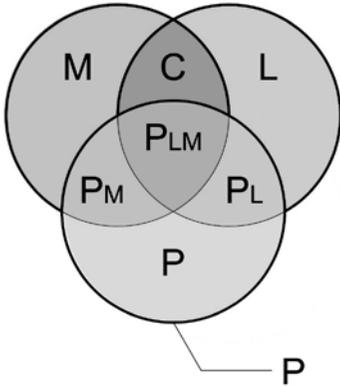


図7 M, L, C, P 4つの行動類型の関係性. P型はM, L, C型の行動類型も内包する場合がある.むしろM, L, C型では説明がつかないものをP型と類型化

表2 L, M, C, P型の統計データ

	21						典型データ 27.66
	外国人	複数来館	特別展入館	13歳以上 12歳以上	16 5	男女 男女	
L(図書館型)	0	8	0	12歳以上	5	9 12	
M(ミュージアム型)	22						典型データ 19.65.68
	外国人	複数来館	特別展入館	13歳以上 12歳以上	22 0	男女 男女	
M	9	16	9	12歳以上	0	12 12	
P(休日公園型)	12						典型データ 4.44
	外国人	複数来館	特別展入館	13歳以上 12歳以上	6 6	男女 男女	
P	0	9	0	12歳以上	6 4	8 4	
C(複合)	13						典型データ 37.43
	外国人	複数来館	特別展入館	13歳以上 12歳以上	13 0	男女 男女	
C	0	9	3	12歳以上	0	6 7	
合計	66						
各種内訳	66						
	外国人	複数来館	特別展入館	13歳以上 12歳以上	57 11	男女 男女	
各種内訳	9	41	12	12歳以上	11	32 36	

えむえむ IV. MMの建築空間的な「矛盾」

えむえむ
MMの前身である龍池小学校は、1929年に本館が建設された後、1937年に北側に新館（以下、北館）が増築された。現在のMMの主空間は、この小学校本館と北館から構成されている。また小学校建築という特性上、子供たちの身体育成のための屋外空間が必要となる。したがって、二つの校舎という分離した建築空間と、運動場や屋上などの外部空間を不可欠とする建築空間が、MMの祖型としてあったことがまず指摘できる（以下、図8～10を随時参照のこと）。

次に、先の小学校を祖型としながら、ミュージアムへ「転用された建築である」という点が特徴として挙げられる。通常ミュージアム建築では内部空間と回遊性が重視されるが、MMにおいてもこの点を考慮した再生が行われたと考えられる。まず先の本館と北館を、「吹き抜け」を通して新たに平面的に接続させ、運動場との接点をそこ一か所に限定することで、内部空間重視の建築空間へと変更された。次に回遊性に関しては、動線が集中する吹き抜け部にエレベーターが新たに配置され、2階部分がブリッジによって接続されている。つまり2つの建築空間が、水平・垂直の両方で内部化・一体化させながら、回遊性を高めたのである。

こうして回遊性が高まる一方で、「吹き抜け」は移動のための中心性を獲得してもいる。というのは、元々の本館および北館へのアクセスに加え、エレベーター設置により垂直方向への重要な移動地点となり、さらに元の体育館や運動場、広いトイレへつながっているからである。しかし、回遊性と中心性が確保された空間構成になっているにもかかわらず、同時にそれを打

ち消すような作用がこの建築空間には働いている。

まず回遊性に関しては、次の矛盾がみられる。「吹き抜け」の西側には、小学校時には子供たちの登校の際の主な通路となっていたはずの本館と体育館を結ぶ廊下や、小さなW階段があり、合理的な移動を行うための「吹き抜け」という機能を裏切る「ややこしい」水平と垂直の移動空間が広がっている。また、MMの見所の一つである「マンガの壁」にも注目したい。というのも、本来は「回遊・移動」を目的とするはずの廊下が、その壁のほぼ全面に書棚が設置されていることで、マンガを読んで「滞留・停止」する空間として再生されているからである。

次に中心性に関する矛盾は、階段にみられる。MMには全部で4つの階段がある。中でも本館のS階段が最も大きく、柱上部の特異な装飾やアーチ、大きな三連の上げ下げ窓など、充実した空間を感じることができる。それに次ぐのはE階段であり、一松模様の規則的なタイル貼りの床に南側からの光が差し込む明るい階段である。次にE階段と同じ大きさとしつらえてN階段があるが、こちらはそれほど明るくない。最後に「吹き抜け」の脇にある小さなW階段であり、窓もなく閉鎖的な補助的階段の印象を受ける。つまり、「吹き抜け」という中心空間から離れている階段ほど、建築的には充実しているのである。ちなみに、この差は、本館と北館の建設時期の違いに起因する。本館は1929年に建設され、まだ様式主義的な雰囲気を残す建築であり、一方で1937年に建設された北館は、装飾が省かれ、機能的な建築となっている。このように、「吹き抜け」が現代的な建築再生過程の中で中心的空間になったにも関わらず、歴史

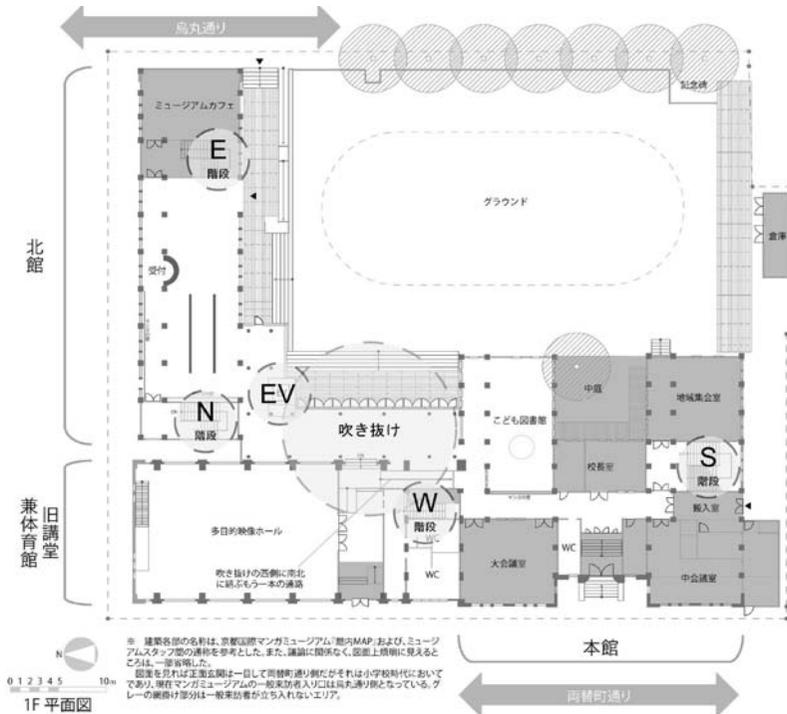


図8 1階平面図

的な空間構成としては、それを反転するような通路や階段のヒエラルキーが存在しているのである。

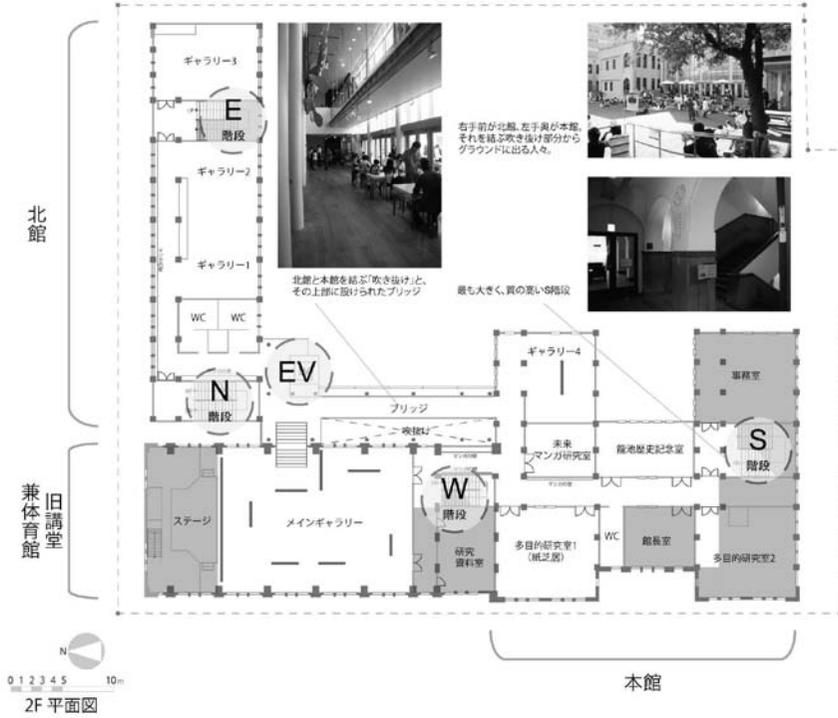


図9 2階平面図

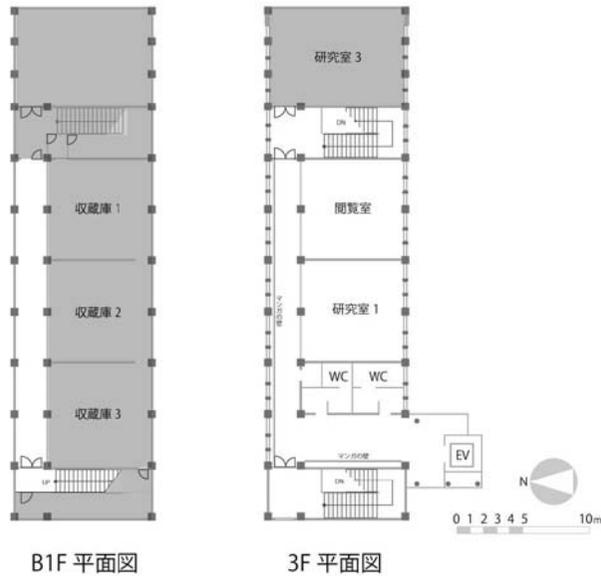


図10 3階、地下1階平面図

さらに、現在の利用法も興味深い。図8～10のようにトーンのかかった部分が一般の来館者には利用不可能となっており、歴史的建築として質が高く見応えがある本館の方が利用可能領域が少なく、北館はその逆となっている。本館の利用可能領域が下がることは、そこを全体の中で「隅」的な雰囲気にする一助ともなり、アンバランスな空間利用と言ってもいいだろう。また、館の入り口に関して言えば、小学校時には両替町通りに面した本館の入り口が用いられていたが、MM以降は、入り口が烏丸通り沿いへと付け替えられ、北館の東端よりアプローチすることとなった。そのため、入り口から本館と北館へのそれぞれの距離が逆転し、本館が最も敷地奥に位置することとなった。本館が「隅」となり、手の込んだ建築空間が利用頻度の低い場所となるという逆転がここでも起きている。

加えて、階段にヒエラルキーがあることを先に述べたが、全ての階段が1階から3階までを結んでいるわけではない。しかも一部は人為的に制限され、端部まで行った後にもう一度中心に戻る必要が生じ、いわば袋小路的な空間を生み出している。つまり、階段の不規則な接続の仕方、利用のされ方が、いわば「迷宮性」とも言える複雑な空間特性を生み出していると言えよう。

以上をまとめれば、①小学校時の二つの校舎という分離した建築空間と、運動場や屋上という外部空間を不可欠とする建築空間が、MMの祖型としてあった。MMへの再生過程で、その二つの校舎が水平・垂直の両方で内部化・一体化しながら、構造的には回遊性を獲得し、同時に「吹き抜け」を中心にした空間構成へと再編された（回遊性と中心性の獲得）。

しかしながら、②現在の空間構成としては「吹き抜け」が中心になりつつも、歴史的な空間構成として、それを反転するような階段や通路のヒエラルキーが存在することとなった。そしてこれらの要因と現在の利用法から、建築空間の充実度と利用頻度や利用可能領域のアンバランスや、「迷宮性」の高まりなどが、生まれてきたと考えられる（迷宮性と反転性の発生）。秩序と迷宮の絶妙のバランスがここに生み出されているといえよう。

そしてこのことが、Pの生成に大きく関与している。ミュージアムとしてみた場合には、回遊性を遮るつくりがある一方で、図書館として見た場合には、その回遊性のために滞留性に限界が生じている（最優先ではない）と言ってもいい。これらのことが、双方の機能に制限を加え、抑制しあい、Pが生成しているといえることができるのである。

V. MMの^{えむえむ}設立理念の複雑性

とはいえ、建築という物理的要素のみが来館者の行動を決定していると考えてしまっているのだろうか。京都国際マンガミュージアムという組織が、この建築をいかに使おうとしているのか、という意図とPとの関係を考慮する必要がある。

MMは、開館当初から、図書館的機能と博物館的機能を併せ持つ総合施設であることを謳っていた。この二重性は、扱っている資料が「マンガ」であることと無関係ではない。そもそもマンガミュージアム構想は、マンガ研究のための一次資料である「マンガ」の収集・保管・整理を目的に始まった。重要なのは、このとき「一次資料としてのマンガ」を、原画ではなく、大量印刷されたメディア、具体的にはマンガ雑誌やマンガ単行本と想定したことである。欧州のマンガ関連施設であれば、収集・保管・整理されるべき「マンガ」とは基本的には原画だ。ゆえに、欧州からの来館者は、「ミュージアム資料」としてマンガ本が並んでいることに違和感を持つのである。しかし、日本の利用者は、ミュージアムにマンガ本がズラリと並んでいて、かつそれらがミュージアム資料として扱われていることに特に違和感を持たない。これは、「マンガ」というものに対する社会的な位置付けの違いが背景にあるだろう。

またMMは、(たとえばボンビドゥーセンターなどのように) 様々な機能が並列されている通常の複合施設とは異なる。図書館的機能と博物館的機能が、同一空間で重層しているのである。つまりMMは、その設立理念においては、博物館的な回遊性と図書館的な滞留性のどちらもアフォードしようとしているのだが、実際には、回遊性の低い博物館であり、滞留性の低い図書館になってしまっている。

こうした、建築的特徴と、MMの設立理念がクロスすることで、空間の意味づけはますますあいまいなものとなり、その結果Pが生成しやすくなっていると考えられるのではないだろうか。

VI. マンガ体験の特徴

さらに、Pの生成を考えると、マンガ体験の特徴も考慮すべきであろう。冒頭にのべたように、マンガは個人的に消費されることが多い。しかしだからといって、これを図書館での読書と同様のものととらえてしまっているのだろうか。図書館で(もしかしたら姿勢を正して)じっくりマンガを読むような読書のあり方は、マンガを読むという行為の特殊形態でしかない。マンガを読む行為は、時々誰かと話をしたり、お菓子を食ったり、寝ころんだりといった行動を伴うものなのではないだろうか。

そうであるならば、そもそもマンガを読む行為は、「読む」という言葉ではいいあられもない体験であり、またそのような体験であることがPのような受容を生み出す原動力になっているといえるかもしれない。

このようなマンガ体験に含まれる「読む」こと以外の要素を考えるためには、グループで来館したときの行動をみてみるとよいだろう。本調査では、被調査者と定めた者が複数来館だった場合でも、そのうちの一人を選び、個人の行動に注目して調査をおこなった。つまり、その

グループにおける個人間の関係性そのものに関しては調査項目にしていなかった。しかしながら、家族連れなど、少なくないグループでの来館とその離合集散のあり方は、^{えむえむ}MMの利用を考える際の重要な要素であるように思われる。例えば、複数で来館したとしても、最終的に別行動に移った個々人はL型の行動をとることが多いが、M型に落ち着く利用者は、グループ形態を保持している傾向にある。

ところで、MMを訪れたことのない人たちはしばしばこの施設を「巨大なマンガ喫茶」と勘違いする。そうした発想の背後には、マンガは一人で黙々と読むパーソナルメディアであるという前提が見て取れる。確かに、典型的なL型の利用者は、完全に自分の世界に入り込んで一人で読書に集中していた。館内でしばしば見受けられる、ヘッドフォンで音楽を聞きながら読書する利用者は、MMという公共空間を「個室化」していると言えるかもしれない。

逆に言えば、複数での来館が、マンガ喫茶（＝図書館的な「読書」を空間的に演出することで成り立っている）とは異なるマンガとの接し方を生み出しているとも言える。例えば、複数で来館した利用者が、マンガをじっくり読むわけではなく、書棚の前でバラバラと立ち読みをしながら、お互いのマンガと人生との関わりを語り合うという風景はしばしば見受けられる（「懐かしい」ということばで、ある種の親和性を高める作業が行われることが多い）。それはしかし、そもそもマンガを読むという行為にあらかじめ内包された可能性なのである。

L型でも、M型でも、C型でもないP型が登場するということを考える上で、今後、複数人での来館というパターンについては（マンガに関心がない人が、家族に連れられて来館するというよくあるパターンの意義も含め）、改めて調査をする必要があるだろう。

VII. ^{えむえむ}MMの今後と本研究の展望

さて、これまでPは^{えむえむ}MM独特のものとして論を展開してきたが、これはミュージアムにおける「聖堂か、フォーラムか」⁹という議論における「フォーラム」ではないかという意見があるだろう。すなわち、ミュージアムは知識層が並べたモノをありがたく拝見する場（＝聖堂）ではなく、来館者の積極的な対話や学びを引き出す空間（フォーラム）でなくてはならないとする、キャメロン・ダンカンの論文に端を発する「フォーラム」としてのミュージアムである。しかし、ミュージアム（museum）という場を前提とした「フォーラム」と、Pとは決定的に異なる。これまでみてきたとおり、Mがあり、同時にLもあり、かつ双方が同じ空間にせめぎ合うことでPは成立しており、その方向性は、単なるミュージアム論の拡張として捉えられないからである。したがって、MMの今後を考えるのであれば、このPをどうするかが鍵になってくる。このことは、たとえば川崎市市民ミュージアム、宝塚市立手塚治虫記念館、三鷹の森ジブリ美

術館など、マンガを扱う他のミュージアムにおける来館者と比較することで、さらに検討していく必要がある¹⁰。

本調査は京都国際マンガミュージアムを事例としてポピュラー文化とミュージアムの関係性について検討するための基礎調査であった。今後この問題を深めていくにあたっては、ポピュラー文化が生起する「場」へのさらなる注視が求められる。そこであらためて、ポピュラー文化におけるプライベート／パブリックな営みとは何を指し、誰とどのように共有されるものなのかを問う必要があるだろう。

- 1 石田佐恵子・山中千恵・村田麻里子（編著）の書籍で使用する予定のタイトルであり、表現。2011年春出版予定。
- 2 1930年代に心理学者Arthur Meltonらが行った調査は、ミュージアムにおけるトラッキング研究としては最初期のものといえる（Problems of Installation in Museums of Art, American Association of Museums, 1935）。日本に来館者調査が入ってきたのは60年代で、当時のトラッキング研究としては、1964年に石田清一・椎名仙卓らが国立科学博物館で行ったものがある（『博物館における観覧行動軌跡』『博物館研究』37(2)、1964、pp6-11）。しかし、そもそも日本における来館者調査自体が80年代後半までは少なく、トラッキング研究は其中でも多くはない。一定量まとまったものとしては、1990年代に建築計画系・建築意匠系の研究者ら（たとえば野村東太、坪山幸王、寺澤勤など）や、展示制作会社が行ったものが報告されている。ちなみに、日本では社会学や民俗学など、フィールドワークを伴う人文・社会科学が方法論化されつつあった1920年代～30年代、今和次郎や吉田謙吉ら「考現学」グループが、都市に生きる人々を「尾行」し、その行動を詳細に記録するという調査を行っており、分野を超えて一定の追跡研究が存在する。
- 3 昨今、プライバシーの観点から、人を追跡してもよいのかという指摘がないわけではない。このあたりの判断は個々のミュージアムの問題だが、本研究では、自然な行動をしてもらうためには告知しない方法を採用した。個人を特定するものではないので、プライバシー侵害にはならないという見解である。なお、MM玄関にて調査をしている旨を掲示し、追跡していることを極力わからないように調査員に促した。また、万が一「バレた」場合は、冷静に説明し、その場で調査を終了するように指導したが、そのようなトラブルは報告されなかった。
- 4 それ以外の調査方法やその系譜に関しては、Hein, 1998および村田, 2003を参照のこと。
- 5 平成21年度仁愛大学学内共同研究費によって行われた。
- 6 2009年10月10日～12月20日にかけて開催
- 7 社会調査に関する知識のある大学生および大学院生（主に京都市内の大学）をアルバイトスタッフと

- して雇用した。
- 8 ただし男性データ33件のうち4件、女性データのうち、3件は途中で追跡者を見失う瞬間があった。また、このデータはなるべく多くのパターンを取ることを目的としたもので、不作為を前提としたサンプリングをしたものではない。したがって数量的なデータではない。さらに、属性は直接聞けないので参考程度のものである。
- 9 Cameron, Duncan F., 'The Museum, a Temple or the Forum?' *Curator* vol. 14(1), 1971, pp11-24
- 10 2010年4月、MMは館内の大規模なリニューアルを行った。本調査はそれ以前のMMを対象としているため、今後はリニューアル後の状況を含めた分析が必要である。

参考文献

- 石田佐恵子「誰のためのマンガ社会学——マンガ読者論再考」『マンガの社会学』宮原浩二・荻野昌弘（編）、世界思想社、2001
- 伊藤遊「考現学で民俗学するということ——今和次郎・路上観察学会・野外活動研究会の「＜日常生活＞研究」作法」『語りと実践の文化、そして批評』文化／批評編集委員会、2003、pp139-178
- 伊藤遊・山中千恵「マンガを通じた国際交流への期待——モナシユ大学の事例から」『マンガ研究』日本マンガ学会、2006、pp.83-94
- 表智之・金澤韻・村田麻里子『マンガとミュージアムが会おうとき』臨川書店、2009
- 今和次郎（著）・藤森照信（編）『考現学入門』筑摩書房、1987
- 川島智生「大正・昭和戦前期の京都市における鉄筋コンクリート造小学校建築の成立とその特徴について——大正12年から昭和9年までの期間」『日本建築学会計画系論文集』第508号、日本建築学会、1998、pp209-216
- 現代風俗研究会（編）『マンガ環境——現代風俗' 93』リプロポート、1993
- 谷川竜一「記憶から紡ぎ出される建築」『生産研究』第57巻 第3号、2005、pp13-17
- 村田麻里子「来館者研究の系譜とその課題——日本における博物館コミュニケーションの展開のための一考察」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第7号、2003、pp95-104
- 吉武泰水（編）・青木正夫（著）『建築計画学8 学校 I』丸善株式会社、1976
- 吉田謙吉・藤森照信（編）『吉田謙吉Collection I 考現学の誕生』筑摩書房、1986
- Cameron, Duncan F., 'The Museum, a Temple or the Forum?' *Curator* vol. 14(1), 1971, pp11-24
- Hein, George E., *Learning in the Museum*, Routledge, 1998